

生きものを扱う

本や色紙に署名させてもらうことが多いのだが、その際「何か一言書いてください」と言われるのが、じつに苦手である。好きな言葉、肝に銘じている言葉はいくつかある。たとえば「グラスの縁に口をつけたら最後まで飲み干しなさい」、これは開高健の著書に出てくる言葉だ。でも、それを書くには躊躇がある。だって、私の言葉ではないのに、自分の署名のわきになんて、恐ろしくて書けない。ならば、自分でそのような言葉を考えればいいのだが、それができない。

人から言われた言葉は、それがどんなにいい言葉であつても、忘れてしまうことが多い。言葉ではなく、その人が私を助けようとしてくれた、力になろうとしてくれた、そのことだけを覚えていて、具体的な言葉自体は忘れてしまうのだ。けれど言葉とは本来、そういうものではないかと私は思っている。たいせつなのは言葉ではなく、言葉の背景にある、状況だったり関係だったりであるはずだ。おなじ言葉でも、何ひとつ響かない人もいるばかりか、怒る人がいたりもする。

書物に書かれた言葉は、幾度でも読み返せるぶん、話し言葉よりは正確に覚えやすい。件の開高健の言葉も、友人たちの生のそれより、真っ先に思い浮かぶ。それでもやはり読み手は、そこに書きつけられた言葉を、自分の状況やそのときの事情によって、万人に向けられたものではなく、自分にだけささやかれた一言として、受け取る。まるで友人の近しい言葉のように。開高健の言葉も、はじめて読んだとき私は打ちひしがれたが、この言葉が好きだと他人に話すと、「飲むのが本当に好きなんだね」と頓珍漢なことを言われたりもする。言葉は受け取り手によって意味もかたちも変える、生きものなのだと思う。

何か一言、を書けない理由はそこにある。自分が小説に書いた言葉をもしだれかがだいじなものとして受け取ってくれたならありがたいが、そうではなく、その人個人に向けた言葉を書くとなると思いつかない。まして色紙など、いったいだれに向けてどんな言葉を使うべきかもわからない。

「好きな言葉を書いてください」と言われたとき、真っ先に思い浮かぶのは、じつは「重版」だとか「ノーカロリー」といった日常のかつ實際的に「好き」な言葉だ。もちろん、そんなあんまりにも個人的な「好き」を、公に書きつけたりすることは、ぜったいに、ない。



©三原久明

神奈川県生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。1990年『幸福な遊戯』で海燕新人文学賞を受賞しデビュー。1996年『まどろも夜のUFO』で野間文芸新人賞、2005年『対岸の彼女』で直木賞、2006年『ロック母』で川端康成文学賞、2007年『八日目の蝉』で中央公論文芸賞を受賞。著書に『森に眠る魚』（双葉社）『くまちゃん』（新潮社）『水曜日の神さま』（幻戯書房）など多数。